

諧謔とイロニー〜メチエの奏でる音楽

ドビュッシーとの対比

坂本 scholiaではこれまでに、バッハ*、ジャズ、ドビュッシー*の3巻をリリースしてきましたが、今回は第4巻として、フランス近代の作曲家、モーリス・ラヴェルをとり上げます。

じつは、当初ドビュッシーとラヴェルの二人で1巻にしようと思っていたんですが、いざ曲を選びはじめると、やはりこの二人を1枚のCDに入れるのはどうしても無理だということだ(笑)、2冊になりました。と言っても、scholiaは30巻で古今東西の音楽を扱っていく予定ですから、そのうちの2巻がドビュッシーとラヴェルというのは、それだけで随分な比重になってしまいうわけですが、もうそこは独断と偏見でいってしまおう、ということだ(笑)。

浅田 フランス近代音楽というと普通はドビュッシーとラヴェルをペアにするけれど、じつはこの二人の方向性は全然違うとも言えますね。ちょうどリスト*とショパ

■バッハ

(1685～1750)
ドイツの作曲家、オルガン奏者、傑出した作曲技術でバロック音楽を大成した。代表作に『マタイ受難曲』『フーガの技法』など。(詳しくは Commons:scholia v01 JSBachn 参照)

■ドビュッシー

(1862～1918)
フランスの作曲家。代表作に『牧神の午後への前奏曲』『海』『レアスとメリサンド』など。(詳しくは Commons:scholia v03 Debussy 参照)

■リスト

(1811～1886)
ハンガリー生まれのドイツのピアノ奏者、作曲家。ピアニストとして活躍する一方、交響詩のジャンルを創始するなど作曲家としても

ン*の関係に似て、テクニク的にも違うし、19世紀末から出てきたドビュッシーと、1900年にはまだ25歳だったラヴェルとでは世代的にも違うので、ひとつにまとめられない部分はたしかにあるんです。

坂本 ドビュッシーはどちらかと言うと、20世紀音楽を準備した父という感じですね。

浅田 そう、19世紀後半のワグナー*やサンボリスム*の霏もやから出て20世紀へ入っていくまでの助走とジャンプというか……。

小沼 そのジャンプしたところにある、ストラヴィンスキー*をはじめとした後継者たちに、ラヴェルは直接繋がっているようにも思えます。

坂本 象徴主義のモヤモヤから抜けて、陽光の下でメカニカルなものを生み出そうとするドビュッシー以降のヨーロッパ音楽の傾向と、旧世代への反抗としての新古典主義*的なものと、両方ありますね。しかもラヴェルはその出自として、フォーレ*の素晴らしい弟子であり、フランスの非常に厳格な古典主義を血肉化しているので、さまざまな要素を持ち、複雑にまたがっているとも言える。

浅田 ドビュッシーが不透明なところから摸索し続けたとすると、ラヴェルは最初からの凄く明晰で、古典主義的な基礎を十分に持った上でモダンにやるにはどうしたらいいか、非常に意識的にやっていた人だと思います。同時にまた、ドビュッシーは

女性関係でスキヤンダルを起こすような人だけれど、ラヴェルに女性関係の影はなく、一生独身を通したダンディで、小さな家にこもって作曲していた。ぼくは、彼が後年任んでいた、パリ郊外、モンフォール＝ラモリにある家に行ったことがあるんですが、ラヴェルが小柄だったということもあつて、もう小人の家みたいなんですよ。

坂本 ラヴェル＝ホビット*ですか（笑）。

浅田 そう。綺麗に装飾されて、機械仕掛けでクルクル回って鳴く小鳥のおもちやとか、そういう物で満たされている。そこにエラルル*のピアノがあつて、その上にお母さんの肖像画がかけてある。ガイドの女性がいいというから、そのピアノで《クランの墓》を弾いてみたんだけど、よくも無謀なことをしたものだ、と……（笑）。そう考えると、巨大な無意識を抱え、時に暴力的とも言える仕方動いていくドビュッシーと、意識の制御下で小さな世界を精緻に組み立てていったラヴェル、そんなコントラストが見えてきます。

坂本 ドビュッシーの場合は、古典的な様式にのっとって書くというより、自分の想像力に抗しきれなくて、どんどん筆が動いていってしまうようなタイプですね。またそれを一種の書法に、方法化しました。ラヴェルはきちんと、いわば時計職人のように設計して書ける。しかも初期の頃からすでに、ほとんど修練の跡が見られないぐら

多くの作品を残した。代表作に《超絶技巧練習曲》（ハンガリー狂詩曲）など。

■シヨバン

（1810～1860）

ポーランドの作曲家、ピアノ奏者。代表作に《別れの曲》《黒鍵のエチュード》《幻想即興曲》など。

■ワグナー

（1813～1883）

ドイツの作曲家。総合芸術としての楽劇を創出以降の音楽界に大きな影響を及ぼした。代表作に《リスタンとイゾルデ》《ニーベルグの指環》《パルジファル》など。

■サンボリスム

印象派や自然主義の客観描写に対し、象徴作用と装飾形式によって想像の世界を暗示しようとする芸術運動。

■ストラヴィンスキー

（1882～1971）

ロシアの作曲家。ロシア・バレエ団主宰のディアギレフに見出され《火の鳥》を作曲した。その他の代表作に《ペトルーシュカ》《春の祭典》など。

■新古典主義

ロマン派への反動として、明快な技法によって古典派以前の時代の音楽に学ぼうとする20世紀音楽の傾向。

■フォーレ

（1845～1924）

フランスの作曲家。サン＝サーンスに師事し、鍵盤奏者として活躍する一方、作曲家としてフランス歌曲の水準を高め、教育者としては優れた後進を多く生み出した。

■ホビット

J・R・R・トールキ